

史料紹介

『看聞日記』現代語訳（八）

蘭部 寿樹

本稿は、室町時代の皇族・伏見宮貞成（一三七一～一四五六）の日記『看聞日記』を現代語訳したものである。本稿の底本は、小森正明代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』一（明治書院、二〇〇二年）である。難しい語などには※の印を付け、その条の末尾に註を付けた。また、日記原文には改行がないが、訳文は内容に応じて適宜改行した。なお、敬語についてはやや不自然な表現があるが、当時の伏見宮貞成の微妙な立場を勘案した結果である。

- 現代語訳（一）～（三） 応永二三年（一四一六）分 『米沢史学』三〇号・『山形県立米沢女子短期大学紀要』五〇号・『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』四二号（二〇一四～一五年）
- 現代語訳（四）～（六） 応永二四年（一四一七）分 『米沢史学』三一号・『紀要』五一号・『生活文化研究所報告』四三号（二〇一五～一六年）

○現代語訳（七） 応永二五年（一四一八）一月一日から四月三〇日まで。『米沢史学』三二号、二〇一六年

本稿で訳出したのは、紙幅の都合上、応永二五年五月一日から八月二九日までの分である。『看聞日記』を現代語訳した経緯などについては、（一）を参照されたい。

本稿により、『看聞日記』の面白さを少しでも多くの方に知っていただき、さらに原文に当たってもらうことができれば、本望、これにすぐるものはない。皆様からのご示教・ご叱正を切に望む。

【主要参考文献】

- 横井清『室町時代の一皇族の生涯』（講談社学術文庫、二〇〇二年、初出一九七九年）
- 位藤邦生『伏見宮貞成の文学』（清文堂、一九九二年）
- 小森正明代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』一～七（明治書院、二〇〇二～二〇一四年）
- 堀畑正臣『看聞日記』に於ける「生涯」を含む熟語の意味―「及生涯」「懸生涯」「失生涯」「生涯谷」等の意味について―（熊本大学『国語国文学研究』四七号、二〇一二年）
- 村井章介「綾小路信俊の亡霊をみた―『看聞日記』人名表記方寸考―」（同『中世史料との対話』、吉川弘文館、二〇一四年、初出二〇〇三・二〇一四年）
- 松岡心平編『看聞日記と中世文化』（森話社、二〇〇九年）
- 松蘭齊『看聞日記』に見える尼と尼寺（愛知学院大学人間文化研究所紀要『人間文化』二七号、二〇一二年）

同「室町時代の女房について―伏見宮家を中心に―」（愛知学院大学人間文化研究所紀要『人間文化』二八号、二〇一三年）

田代博志「山城国伏見荘における沙汰人層の存在形態と役割」（『中近世の領主支配と民間社会』、熊本出版文化会館、二〇一四年）

（応永二十五年）五月一日、晴。夜になって雨が降り出した。いつものように、月始めのお祝いをした。殿上の前庭で、小弓を射た。賞品は田向経良三位が用意した。最近決めた順番で当番の幹事役を勤めたのである。田向家で百手（※）をやるうという話になった。

※百手（ももて）：通常は歩射（ぶしや）、すなわち馬上からではなく、立つか座るか姿勢で弓を射ることを意味する。しかし、ここでは後掲三日の記事のように、百本の矢を射ることを意味している。

二日、晴。夜になって雨が降り出した。小弓を射た。明日、百手をやることに決まった。田向経良三位に酒宴などを用意するように命じた。京都では等持寺八講が始まったそうだ。今出川実富大納言が参列したという。

百手会

三日、雨が降った。百手会は延期となった。ところが夕食時になって雨が上がったので、百手をやりましょうと田向経良三位が言ってきた。それで、田向家に行った。

まず一献の酒宴があった。そして百手を射始めた。途中で雨が降り出したので、その間お休みして酒を飲んだ。その後、雨が上がったので、また射始めた。三十回あまり射てから、また酒を飲んだ。外は真っ暗になったので、的場に口ウソクを立て、射手の前には小

さな灯りを立てた。夜になって小雨がまた降り出したが、かまわず射続けた。午後九時になって百本の矢を射終えた。また引き続き二献・三献の酒宴をした。

百手会の賞品である銭は、負けた者が負担することになっている。田向経良三位が一番多く射当てた。そういう経緯で、百手終了後、これまでの酒宴の費用は私がつことになった。その後、田向三位・庭田重有朝臣・田向長資朝臣、それに村人たちがお酒を用意して、数献の酒宴となった。夜遅くになって宮家に戻った。

今回の百手会の射手は、私・椎野寺主・田向三位・重有・長資ら朝臣、村人の行光・小川禅啓・芝俊阿・広時・下野良村・小川有善・内本善祐らであった。弓場は東向きに的をかけた。殿上人より上位の者は室内から矢を射た。村人たちは庭先から射た。

四日、朝早くいつものように節供のため、屋根に菖蒲を葺いた。薬玉を室町殿へ常宗を通して進上した。室町殿の若君には内々に室町殿御所の女房を通して進上した。いずれからも、おめでたいことですというお返事が返ってきた。以前から薬玉を送っているところへは、みな配り終えた。今出川家からは、いつものように根の付いた菖蒲枕などが献上されてきた。

また小弓を射た。賞品を賭けたのもいつも通りである。最近、小弓会を盛んにやっている。つまらないことに熱中しているものである。

五日、晴。「端午の節供で、良い兆しがあり、とても幸せだ」と予祝した。風呂に入った。その後、いつものように節供のお祝いをした。また小弓を射て、いつものように勝負した。

六日、晴。等持寺八講の最終日である。今出川公富中納言が参列したそう
だ。

庭田重有と賀々の男児誕生

八日、晴。風が吹いて、夜には雨が降った。御香宮にお参りした。女官賀々が男子を安産したそう
だ。庭田重有朝臣の子供である。お産の血で穢れる前に、急いでお参りに行ってきたのである。

九日、雨が降った。陽明局の部屋へ行って、酒を飲んだ。伏見荘のこと
に
関するお礼だということ
で（※）、政所の小川禅啓がこの酒宴を用意したのである。その後、私・田向経良三位・田向長資朝臣の三人で囲碁を打った。

※「伏見荘のことに関するお礼だということ」：原文では「当所のことにつき」とあるだけで、詳細は不明。

十日、晴。山城国武藏堀池のことで、性徳院から使者の僧が来た。武藏堀池のうちの性徳院領地の山野について生島明盛に心がける（※）よう命じた命令書を書き、この使者に与えた。いつものように、小弓の勝負をした。

※「心がける」：原文では「心倚る（こころよる）」とある。

十一日、雨が降った。囲碁の総当たり戦をした（※）。私・椎野寺主・田向長資朝臣の三人で囲碁を打った。

※「総当たり戦」：原文では「廻り打ち」とある。

足利満詮の死去

十四日、雨が降った。聞くところによると、小河大納言入道足利満詮が今日の明け方亡くなったそう
だ。

故庭田経有明堯禅門の七回忌前日なので、田向家で仏事があった。

私は奉納のための写経を少しした。

庭田経有の七回忌

十五日、雨が降った。今日は、故明堯禅門の七回忌当日なので、庭田家で仏事があった。即成院主・行藏庵主・草玉庵主・塔頭比丘尼らが仏事に招かれてきた。蔵光庵主が仏事の導師となった。田向家など親族の者たちも大勢集まったという。私は懇志をあらわすため、写経した法華経寿量品にお布施を加えて送った。

聞くところによると、小河殿足利満詮に、勤修寺経興藏人頭兼右少弁が手続きをとって、従一位左大臣の官位が贈られたそう
だ。足利家父祖に対する先例の通りである。小倉公種前中納言は小河殿を介護していた。それで小河殿の死を悲しみ、出家の許しを朝廷に申請したそう
だ。それに関連して、小倉は大納言の官職を希望して、結局、正二位大納言の官位が与えられたという。それですぐに出家したそう
だ。

足利満詮没後の処置

十六日、曇。身を浄めた。退蔵庵・指月庵などを椎野寺主と一緒に見て回った。

聞くところによると、今日の明け方、小河殿が火葬されたそう
だ。

点火の儀式は三合院主が勤めたそう
だ。この三合院主大岳和尚は、鹿苑院の前の住職だった方である。念誦の役は環西堂が勤めたらしい。小河殿の称号は、養徳院贈左大臣だそう
だ。ところが遺産を相続する者がおらず、家は断絶するらしい。息子はいるのだが、相続を放棄したという。娘は室町殿の若君に嫁いでいる。領地などは、婿である室町殿若君にすべて譲られるそう
だ。小河殿に近習奉公し

ている者たちは全員、この若君にお仕えするよう、小河殿自らが遺言なさったそうだと。

室町殿の穢れ

このことについて室町殿にお見舞いをしようと常宗に相談したところ、室町殿自身が近親者の死で穢れてしまったので、朝廷の関係者は室町殿の御所に来てはいけなないと、室町殿がおっしゃっているそうだと。それで、室町殿の命を受けた広橋兼宣卿が常宗に三十日間御所へは立ち寄らないようにと指示したという。広橋卿だけは御所への出入りが許されているらしい。

【頭書】（「日記の上方の隙間に書き加えた記事）後で聞いたところによると、小河殿の娘と若君との間には何もなかったらしい。その娘は室町殿御所で出家して尼になられたという。小河殿としては無念なことであろう。

源氏物語書写の依頼

十九日、晴。いつものように小弓を射た。さて水無瀬具隆三位入道が源氏物語の橋姫・夢浮橋の二帖と表紙を金欄で飾った料紙を送ってきた。私に源氏物語の書写を依頼してきたのだ。「私は悪筆なので書写など思いもありません」とすぐに返却した。

この源氏物語の双紙を企画した主は、誰なのであろうか。もしかしたら、水無瀬殿の婿である三条公光大納言かもしれない。上皇御所の上臈である三条実冬太政大臣の娘あたりなどの縁をたどって、書写を依頼してきたのかもしれない。それにしても全く思い寄らないことなので、源氏物語と料紙を返した次第である。

二十二日、雨が降った。小河殿に関するお見舞いを、広橋兼宣を通し

て室町殿へお伝えするよう、綾小路信俊前参議に命じた。

二十四日、冷泉正永が来た。囲碁や双六の総当たり戦（※）をした。賞品も出した。その後、少し酒を飲んだ。

※「総当たり戦」：原文では「回し打ち」とある。

伏見荘包守名

二十五日、晴。風呂に入った。さて去年、綾小路信俊前参議にご恩地として与えた三木一族からの没収地は支配不能の地なので、改めて包守名内の畠地五反を与えることとした。田向経良三位に書かせた命令書を綾小路に発給した。大変ありがたく存じますと綾小路からの返事が来た。囲碁の総当たり戦（※）をした。宮家の男どもが酒を準備した。昨日のお礼だという。

※「総当たり戦」：原文では「廻し打ち」とある。

二十六日、晴。椎野が寺へ帰っていった。さて水無瀬具隆が先日の源氏物語二帖をまた送ってきた。いづれにせよ私の下手な字を知らない人の差し金なのであろう。「そのところを、まげてお書きください」と丁寧に頼んできた。この上はしかたないので、了承した。背後に三条家の意向があることはまちがいあるまい。

播磨国飾磨津別府の支配

さて飾磨津別府のことで、守護請をしている赤松小寺入道性応から連絡があった。萩原宮直仁親王の娘である平岡御比丘尼が赤松小寺入道の収納作業に異を唱えているそうだと。重ねて詳細な指示を小寺に伝えた。

納涼のため船を水に浮かべた。囲碁を打った。

二十七日、晴。少し酒を飲んだ。冷泉正永が帰っていった。智恩院主

が宇治茶を贈ってくれた。

三十日、晴。体調が悪く、一日中、寝ていた。

六月一日、晴。「すべてのことにおいて、とても幸せだ」と予祝した。

いつものように、愛染玉堂にお参りした。

マラリア再発

二日、晴。午後一時に寒気におそわれるようになり、とても気分が悪くなった。もしかしたら、マラリアが再発したのかもしれない。この二三年、毎年マラリアの発作があり、持病のようになっていた。夜に入って、気分は少しよくなった。

京都の不穏な戒厳状況

さて聞くところによると、このところ、世間には不穏なうわさがあるという。諸大名が領国の軍勢をひそかに京都へ呼び寄せているらしいのだ。それがどの大名であるか、はっきりしないが、いずれの大名も警戒して厳重に警備している。

室町殿御所でも警備を固めているそうだ。室町殿御所の四方の小路に、大きな木戸をお立てになった。そして日が暮れる前から、その木戸を閉ざして誰も通さず、警戒しているという。細川満元管領らが御所を訪れても、御所の中にはお入れにならなかつたそうだ。

四日、晴。午後一時にまたマラリアの発作があった。気分がとても悪い。午後五時になって熱は下がった。今朝、退蔵庵の僧がマラリア落ししの秘術を施してくれたのだが、その効果はなかった。ただし今回の発作は治りかけのものなのかもしれない。

五日、晴。広橋兼宣から田向経良三位へ京都へ来るようにと呼び出した。それで、田向は京都へ出かけて行った。

六日、晴。午後三時にマラリアの発作が少々あった。でもしばらくして熱は下がった。退蔵庵のあの僧の秘術で、マラリアは落ちたのであろう。とてもありがたいことだ。

伏見宮家に男児は居るか

田向三位が帰ってきた。広橋と心静かに話をしてきたという。小河殿についてのお見舞いは、先日、広橋が室町殿へお伝えしたという。そのついでに、「この伏見宮家に、男の子がいるかどうか」と、室町殿がお尋ねになったそうだ。広橋は「存じませんので、伏見宮家に照会してみましよう」と答えたという。

どうも青蓮院の義円や仁和寺御室の永助法親王にはいずれもお弟子がいないので、男の子は大事だと目を付けられているようだ。室町殿は、「伏見宮家に男の子がいるといううわさを聞いたので、本当かどうか尋ねてみたのだ」と仰ったそうだ。「男の子は一人もおりません」と田向三位は広橋に答えたという。ところが広橋は隠しているのではないかと内心まだ疑っているらしい。私に男の子が生まれたいのは、とても不運なことである。

畠山と山名に対する処分動き

世間で物騒なうわさになっているのは、畠山満則修理大夫入道と山名時熙右衛門督入道の身の上に関するところのようだ。どうも両大名が足利義嗣押小路大納言の謀反に同意したのではと疑われているらしい。

実際、土岐与康はこの謀反に同意したため、死んでいる。土岐与康の子息持頼も同罪だということで、すでに伊勢国守護を解任され、所領数ヶ所も没収された。富樫満成を通して、山名時熙は室町殿か

ら自宅謹慎を命じられているという。このようにすでに事態は動き始めている。この結末は、どうなるのであろうか。

七日、晴。祇園会は、小河殿の死去を憚って、派手な演出はなかったという。しかし、若君・足利義量殿と室町殿御台所はお祭りを見物されたようだ。伏見宮家では祇園内祭として酒宴があった。宮中の男女が酒宴の用意をした。

玄超庵

玄超庵が完工したというので、見に行つた。田向経良三位らを連れて行つた。きれいな建物であつた。

侍所所司代の怪しい書状

八日、晴。幕府侍所所司代から書状が来て、小川禅啓と三木善理の二人に対して、侍所に出頭するようにとのことだつた。去年の盗犯事件に関して事情聴取をするのだという。そしてこの召喚は、將軍の上意によるものだと書かれてあつた。宮家の責任者である田向三位は留守だと言つて、所司代の使者を追い返した。そもそも上意だという点が疑わしい。

さて久我通宣前右大將が室町殿から許されて、京都の自宅に帰つたという。そして子息の久我清通三位中将も、中納言に昇進した。この件は、去る応永二十二年（一四一五）大嘗会の豊明節会で、称光天皇陛下に御挿頭花を差す役を室町殿と久我通宣前右大將が争つた。このことで、怒つた室町殿は久我を追放なさつたのだ。そのため久我通宣は右大將を辞任して、領地である久我荘へ謹慎していらしたのである。最近になって久我は許されて、出仕するようになった。そして臨時の官位任命式があつた。このとき、正親町三条公雅中納

言が大納言に昇進したようだ。

九日、晴。御香宮に花を供えることを今日から始めた。所司代からまた使者が来た。担当者は留守だと言つて追い返した。

十日、晴。侍所所司代の一色義範に返事を出したところ、また書状が来た。三木と伏見荘政所禅啓の兩人を召喚して尋問すべきだと侍所所司の富樫満成が仰つているので、召喚しないわけにはいかないという内容だつた。それで「明日、侍所に出頭させましょう」と返事した。

京都一条烏丸の薬師堂が焼失

聞くところによると、昨夜、一条烏丸の薬師堂が焼失したという。このお堂は、一昨年火事で焼けている。お堂の再建が完了しないうちに、また火事で焼けた。灯籠の火が失火原因だという。薬師如来の思し召しはいかなるものであろうか。

十一日、田向経良三位と小川禅啓が侍所に出頭した。三木が伏見荘へ帰住することは難しいという実情を室町殿へうまくご理解していただくよう、広橋へ書状を書いた。書状の礼節として、本文末尾を「謹言」と書き止めた。ただ思うところがあつて、名前も記載した。また広橋とは、室町女院領のことで、相談することもあつた。

侍所所司代での顛末

十二日、晴。田向三位が帰つてきた。侍所所司代のところへ出頭したが、三木善理は来なかつた。使者を派遣して何度も呼び出しをかけたが、とうとう来なかつた。そのような状況を所司代に説明しておいた。今朝もまた禅啓は所司代の所へ行つたが、三木はおも出頭しなかつた。結局のところ、三木は所司代を怖がっているのだろう。

三木の主人である畠山満家の顔色を伺っていない段階では、侍所へ出頭することはできないということなのであろう。それにしてもおかしな話である。やはり侍所の上意というのもうそで、やはり中間管理者である侍所司代が無責任な措置（※）ではないだろうか。
広橋に対する世間の批判

田向三位は広橋と対面して、室町女院領のことについて詳しく相談してきた。広橋は、三木のことについても、機会をみて將軍に実情をしっかりと伝えするつもりだと答えたそうだ。しかし御領のことについては、最近このようなことを將軍に申し入れるのは遠慮していると言った。この広橋について、落書（※）の札が立ったという。その内容は「最近の広橋は、人の訴訟をとりつがない」というものだった。

琵琶法師の椿一検校

琵琶法師の椿一検校が来て、平家物語を語った。聴衆が大勢集まった。

※「中間管理者である侍所司代の無責任な措置」：原文では「中央の儀」（上意だと称して家臣が実権を振るうこと）と表現されている。応永二十六年四月十六日条を参照のこと。

※落書（らくしよ）：政治批判の風刺。有力者の門前などに和歌などの形で落書の札が立てられた。

森船

十三日、晴。玉櫛禅門が希望したので、森船（※）を与えた。小川禅啓が帰ってきた。三木善理は侍所にととうと出頭しなかったそうだ。こういう事情なので、禅啓を伏見荘へ帰し、詳しい事情を將軍へお

伝えすると侍所司が話したそうだ。こちら側としては吉報である。

鹿苑院主鄂隠の逃亡

さて鹿苑院主の鄂隠和尚が、昨日、兵庫へ逃げ去ったという。北九州の筑紫へ逃げたといううわさもある。臨濟宗僧侶のなかでは比べようもない権力者でありながら、突然このようなことになるとは、定めなきは人の世だと、今更ながら驚き入る次第である。鄂隠和尚とは仏道の師匠として契約し頼みにしていたのに、残念室極である。

※森船：未詳。応永二十三年（一四一六）二月二十三日条に伏見荘の土倉である宝泉が森船を新造したという記述がある。

十四日、晴。祇園祭が定例通り行われたそうだ。風呂に入った。浴室で酒を飲んだ。

十五日、晴。周乾首座がいらつしやった。五日に後堂寮から退室したそうだ。

鹿苑院主は十二日に逃げ出して、土佐国の吸江庵に向かったらしい。鹿苑院主の弟子たちはみな、相国寺に休暇を申請して寺を離れた。しかし弟子たちは許されて、相国寺に戻ったそうだ。室町殿はとても不快に思っているらしいので、今回の出来事を口にするこ

備中国大島保・播磨国飾磨津別府

とさえ憚られる状況らしい。不都合なことである。香雲庵主が来た。十七日、晴。梅尾の経増が酒一献分の銭を持参してきた。これは、願い事があったことだ。備中国大島保四分の一と播磨国飾磨津別府は、経増が相伝して管理している領地だという。そのことを証明する書類をお目にかけますので、これらの領地をお返しくださいと言ってきた。しかし大島保全域を町経時が支配するよう、すでに命

令書をだしている。また飾磨津は最近、播磨国守護請として代官を任命したばかりである。いずれの領地についても、経増の言い分をかなえることは難しいと返答した。

日向国平群荘

田村盛兼左京亮が来て、日向国平群荘の代官職に任命してくださいと言ってきた。支配が難しい遠国の代官職を望むとは、なんだか怪しいものだ。しかし、とりあえず任命してやった。

十八日、晴。風が吹き、夕方、にわか雨が降った。夜更けには大風が吹き、大雨が降った。惣徳庵主が来た。

十九日、昨夜からの雨風はまだ止まない。このところ、ひどい日照りが続いていた。そのために、東寺や三井寺に雨乞いの祈禱が命じられていた。昨日からの風雨は、その効き目なのであろうか。終日終夜、雨は止まなかった。二十日の明け方になってようやく大風は止んだ。

恵舜蔵主の一周忌

明日は、母違いの兄弟である故恵舜蔵主の一周忌である。そのために禅照庵に入って、ささやかな仏事をした。また施餓鬼も行った。対御方・近衛局も参列なさった。

二十一日、晴。対御方が京都へ出かけた。二十四日が故正親町三条公豊内大臣入道の十三回忌なので、その仏事に参列するため三条家へお出かけになったのである。相国寺長老は故九条経教禅閣入道の息子である。その相国寺長老が鹿苑院へお移りになったという。相国寺長老が鹿苑院主を兼帯なさるのでそうだ。

二十二日、晴。大光明寺の風呂に入った。大光明寺からの提案で、ま

ず指月庵へ行き、大光明寺の風呂に入ってから、また指月庵へ戻った。大光明寺の手配で、指月庵にお茶の用意がしてあった。お茶と五種類の茶菓子などを味わった。羅茶(※)を一包み、大光明寺長老が献上して下さった。うれしかった。田向経良三位らがお供をしていた。

※羅茶(らっちゃ)：茶・甘草などの漢方生薬に香木を混ぜて丸状にした酔い覚ましの薬。蠟茶。橋本素子氏のご教示による。

二十三日、夕方、にわか雨が降り、雷が鳴った。この六月、夕立はあまり降らなかった。

二十四日、晴。光明上皇の命日なので、大光明寺で御仏事があった。生前、父の栄仁親王はこの命日には必ず大光明寺へ焼香しにお参りなさっていた。しかし、私は今日、お参りしなかった。水無瀬具隆が依頼していた源氏物語の書写を、今日から始めた。まず夢浮橋を書いた。

聞くところによると、京都に滞在中の対御方は、権野寺主がいる浄金剛院へ行かれたそうだ。今日が故正親町三条公豊内大臣入道の三十三回忌なので、焼香をしに行ったという。正親町三条公雅大納言の一族も浄金剛院に参詣したそうだ。たまたま浄金剛院に行っていた庭田重有朝臣が詳しく話をしてくれた。

二十五日、雨が降った。毎月定例の連歌会を、生島明盛と行光が当番の幹事となって、いつものように準備をした。

大津馬借の騒動

さて今日の明け方から京都の祇園社に大津の馬借数千人が立て籠もり、神輿を飾って延暦寺僧の円明坊兼承のところへ押し寄せよう

としてゐるらしい。祇園社の修行坊などの坊々へ、悪党たちが乱入しているという。さらに祇園社周辺の家々を没収するように壊しまくって、篝火として焼いている。もし大津の馬借たちの訴えが通らなければ、祇園社に放火すると喚んでいるらしい。

彼らを追い払うため、幕府の侍所から大軍が悪党のところへ向かっていった。しかし合戦にはならず、賀茂川の河原で両者にらみ合いになつてゐるらしい。京都市内には、この騒動を見物しようとお勢が雲霞のごとく集まつてゐるようだ。將軍が馬借たちに命令書を出したことにより、騒ぎは収まつたという。事の起りは、米売買ルートの開通をめぐる争いにあるらしい。この件で円明坊が根拠のない決定を下したことが原因のようだ。

深草郷内の合戦

二十六日、晴。今日の明け方、深草郷で合戦があつた。これは同じ深草郷内（※）での争いだという。伏見荘からも所縁によりそれぞれの方へ加勢した者たちがいた。この村人たちも少しけがをしたららしい。

※「同じ深草郷内」：原文では「庄内」とあるが、深草荘は存在しない。二十七日、晴。今日は、今出川公直左大臣の奥方であつた故東向殿の二十五回忌である。東向殿は、私の養母であつたので、お経を読んだ。尼たちにもお経を読んでもらつた。

花園天皇直筆の障子

さて大工を呼んで工事をさせた。常御所と庇の間にある中柱を撤去し、そこに障子を三枚立てた。この障子は萩原殿官直仁親王のものであつた。この障子の絵は、花園天皇が自らお描きになつたもの

である。また裏辻忠季卿の筆も交じてゐる。色紙形に書かれた漢詩は、青蓮院尊円法親王の直筆だ。あれやこれや、とても貴重で、大事にしている障子である。鶴・鶏・鶯・鴻などの絵が描かれてゐる。ただし一部壊れてゐるので、修理させるつもりである。

二十八日、晴。昨日同様、工事が行われた。そして今日、完工した。二十九日、晴。綾小路信俊前参議が来た。このところ顔を出してゐなかつたので、珍しいことであらう。一献の酒宴を綾小路が用意してくれた。綾小路は、近年恒例となつてゐる六月祓の茅輪を作つて持つてきてくれた。

まず、風呂に入った。その後、音楽会をした。平調の曲を七つ、朗詠二首をした。夜にいつものように六月祓をした。綾小路前参議が茅輪を出した。田向経良三位らも同じようにお祓いをした。その後さらに一献の酒宴をした。

七月一日、晴。「初秋のよい季節で、とても幸せだ」と予祝した。豊原郷秋が来た。綾小路前参議が伏見宮家におられると聞いたので来たそう。音楽会をした。双調の鳥破・鳥急・颯踏入破・賀殿急・北庭楽・伴奏付きの朗詠・胡飲酒破・酒胡子・武徳楽・陵王破を演奏した。綾小路前参議と田向長資朝臣は太鼓も打つた。郷秋は今夜、宮家に泊まつた。

二日、晴。豊原郷秋がいたので、今日も音楽会をした。黄鐘調の桃李花二帖・喜春楽序・喜春楽破・河南浦・海青楽・朗詠（私が伴奏つきで歌つた）・平蛮楽・鳥急を演奏した。綾小路前参議と田向長資朝臣は太鼓も打つた。音楽会が終わつて、郷秋は帰つた。七夕に和歌を奉納するため、皆に和歌の短冊を配つた。

新内侍懐妊の疑惑

ところで、今出川公行殿から書状が来た。朝廷の新内侍は、故五辻朝仲宮内卿の娘だ。その新内侍が妊娠したそうさ。この新内侍は、喪に服するため、今年の正月に伏見荘内の山田香雲庵にしばらく滞在していたらしい。この新内侍は、勾当内侍長橋局である藤原能子殿の娘である。その関係から、長橋局が娘を香雲庵に預けておいたそうさ。そのため、「新内侍が妊娠した子は私の子ではない」と、称光天皇が仰っているそうさ。この春に新内侍が伏見荘に滞在している間、この御所の誰かが妊娠させたのではないかと疑いがかけられているらしい。「こういう状況なので、お気をつけ下さい」と今出川殿は忠告してくれた。この新内侍は伏見宮家に全く何も連絡してこなかったため、当然の事ながら私も侍臣も事情を説明せよとの命令を受けていない。しかし、あらぬ疑いがかけられる恐れもある。用心、用心。

三日、晴。太食調の打毬楽・道行・太平楽・合歡塩・傾坏楽急・仙遊霞・輪鼓禪脱、催馬楽、伊勢海・庶人三台・更衣・抜頭・朗詠の第一第二絃(※)・長慶子・王照君を演奏した。綾小路前参議がいるので、毎日、音階を変えて音楽の練習をしている。

※第一第二絃：『和漢朗詠集』管弦四六三。

宇治の今伊勢神宮

四日、晴。綾小路前参議が宇治の今伊勢神宮に参詣するというので、はなむけの盃として酒を飲んだ。その後、音楽会をした。盤渉調の曲、宗明楽・十二拍子の蘇合序・三帖・三帖破急・万秋楽序破・秋風楽・輪台・青海波・竹林楽・朗詠などをした。

五日、晴。一越調の回盃楽・春鶯囀序・颯踏入破・賀殿破急・北庭楽・朗詠の二星適逢(※)・陵王破をした。夜にまた右楽の古鳥蘇・皇仁破・皇仁急・狛鉾・納曾利を演奏した。後小松上皇様が今出川家へ七夕の花合せに花瓶を二つほど出しなさいとお命じったそうさ。それで、伏見荘の草花を少々くださいませんかと言ってきた。お送りしましよと返事した。

※二星適逢：『和漢朗詠集』秋二二三。

六日、晴。今出川家に草花を一筒送った。高麗の曲である退走徳・崑崙破急・長保楽破急・地久破急を演奏した。音楽会を終わってから、綾小路信俊前参議が出ていった。七夕まで伏見宮家にいると言っていたが、上皇御所の音楽会に参加しなければならなくなったということに戻っていった。伏見に留めることができず、残念だった。

七夕の草花奉納

七日、晴、夕暮れ時にわか雨が降った。朝早く、いつものように七夕で、和歌を梶の葉に書いて奉納した。光厳上皇の命日なので、大光明寺に行って、焼香した。光厳上皇の命日にお参りするのは、私の代になって初めてのことである。田向経良三位・庭田重有朝臣・田向長資朝臣を連れていき、お経をあげた。地藏殿で冷水干し米・果物をお供えし、下ろしたお供物を皆で食べた。次に、長老と会ってお話ししてから、帰った。

さて七夕に奉納するため、草花を集めた。まず会所にした常御所を少し飾った。屏風一組を立て廻し、それに中国風の絵五幅を掛けた。その前に棚を一脚立てた。棚の各段に花瓶やいろいろな置物を並べた。その左右の脇に机を立て並べ、その上に花瓶をいくつかと

お盆などを置いた。北の間には本尊の達磨の絵を掛け、その前に机を一つ置き、毛織物一枚を敷いた。室内の飾りはだいたい以上のようだ。

花を献上した人々

花を献上した人々は以下の通りである。私は茶碗の花瓶一つ、田向三位は青銅製のお盆に花瓶一つ、庭田重有朝臣も青銅製のお盆に花瓶一つ、田向長資朝臣は青銅製の盆に花瓶一つ、即成院主は青銅製の香台二つに花瓶二つ、退蔵庵主は青銅製蓮花立ての花瓶一つ、光台寺住職は青銅製のお盆に花瓶一つ、玄忠も青銅製のお盆に花瓶一つ、光意も青銅製のお盆に花瓶一つ、行光も青銅製のお盆に花瓶一つ、小川禪啓は青銅製の香台に花瓶一つ、小川有善は青銅製のお盆に花瓶一つ、宝泉は青銅製の唐盆二つに花瓶二つ、このほか大光明寺住職・蔵光庵主・法安寺住職・下野良有からは花だけが届けられた。以上で花瓶は十五揃った。

節供の準備は下司の役

まず風呂に入った。その後、いつものように節供のお祝いをした。下司の役として広時が節供の準備をした。三献の酒宴が終わって、七夕に奉納した和歌のお披露目があった。田向三位・重有朝臣・長資朝臣らが和歌を詠みあげた。和歌を出したのは、私・椎野寺主・二位入道光恵・綾小路三位（田向三位）・重有朝臣・長資朝臣・冷泉正永・冷泉永基である。三十首のお披露目が終わって、また一献の酒宴となった。節供の儀式が終わって、音楽会となった。一緒に演奏したのは長資朝臣一人だけだった。特に盤渉調の曲を七つと朗詠などを七夕に奉納した。

上皇御所の音楽会

さて上皇御所の七夕花合わせも通例通りだったそう。今出川公行左大臣が今回初めて花瓶二つを献上したという。音楽会では、まず盤渉調の採桑老・万秋楽序破・蘇合急（三反の説通りに残楽をした）・秋風楽・輪台・青海波・千秋楽を演奏したそう。その後、舞人が立って、賀殿・地久・陵王・落躡が演奏された。演奏者は、笛が太炊御門信経前中納言・洞院満季中納言・綾小路信俊前参議・中院光相朝臣・山井景親・同景清・同景藤・同景勝・同景興。笙は中御門宗量中納言・山科教有朝臣・白川資雅朝臣・四条隆盛朝臣・豊原藤秋・同幸秋・同家秋・同郷秋・同敦秋・同村秋・同勝秋・同遠秋・同久秋。箏は楊梅兼邦前兵部卿・同兼英朝臣・同兼豊朝臣・安倍季長・同季量。琵琶は今出川公行左大臣・園基秀前参議・孝長朝臣・園基世。箏は後小松上皇様・裏辻実秀中納言・四辻季保朝臣・同季俊朝臣。鞆鼓は山井景房、太鼓は豊原為秋、鉦鼓は敦秋、三鼓は郷秋。舞人が立った時、後小松上皇様は笙をお吹きになったそう。

蘇合急三反の説

さて蘇合急三反の説について、今回の音楽会にあたり、中御門中納言と季保朝臣の二人を使者として、殿上人や六位以下の演奏者に対してお尋ねがあった。ある者ははまだ伝授されておりませんと答え、ある者は二つの説を伝授していますと答えたという。結局、三つの説のうち、箏の説を知っている者は演奏をしなさい。たとえ三反の説を知っていても、箏の説を知らないのなら、演奏してはいけないというお達しだった。

各人の反応

今出川左大臣は知っていると申された。洞院中納言は伝授されていませんが、山井景秀からとりあえず口伝を受けていますと申告した。それでこの二人は、今回、演奏してもよろしいと後小松上皇様の許可が出たようだ。

楊梅兼邦は知りませんと言っておきながら、当日になって知っていますと言い出した。どうも譜面を見てから、言を翻したらしい。以前に申告した話と違うのはよろしくないその後小松上皇様は仰つて、楊梅の演奏を止めさせたようだ。

太炊御門中納言は知りませんと申告した。山井景房は二つの説は知っていますと申告したが、箏の説は知らなかったので演奏を差し止められた。山村景親は知っていますと申告した。豊原郷秋は三つの説すべて知っていますと申告したので、神妙であると後小松上皇様からお褒めがあつた。その他の者たちはほとんど知りませんと申告したようだ。

それで三反の説で演奏したのは、今出川左大臣・洞院中納言・中御門中納言・裏辻中納言・四辻朝臣・景親・景清・景藤・藤秋・為秋・幸秋・郷秋・敦秋らだけであつた。他の者たちは、蘇合急の演奏を一切しないようにと命じられたようだ。残楽で笛は洞院中納言、笙は中御門中納言、琵琶は今出川左大臣だった。

貞成の批評

この残楽の秘説に関する上皇様のご命令について、あまり感心しませんでしたと、後になって郷秋が言っていた。このように六位以下の楽人の年功者が演奏をしないというのは、めつたにないことだ

という。しかし、いずれにせよ、雅楽の道が再興されるのはとても喜ばしいことだ。今出川左大臣が演奏なさつたのは、幸運なことである。数日前に上皇様から諮問があれば誰もが皆にわか伝授をうけたであろう。しかし、当日その場になってご下問なさつたのは、深いお考えがあつたことだ。以上、郷秋がいろいろとくわしく話してくれたので、記録したのである。

【頭書】世尊寺行豊朝臣に七夕の短冊を送つたのに、和歌を詠んでこなかつた。どうしたことだろうか。

八日、晴。昨日の花瓶や部屋飾りはまだ片づけていない。小川禪啓と広時がお酒を用意してくれたので、飲んだ。今出川左大臣から手紙が来た。三反の説に関する昨日の顛末が詳しく書かれてあつた。

九日、晴。花瓶や部屋飾りなどを片づけた。豊原郷秋が来た。盤渉調の曲を七つ演奏した。

十日、晴。対御方が三条家から戻ってきた。数日実家に帰り、にぎやかだつたようだ。世間話をしてくれた。新内侍が妊娠した件に伏見宮家に関わっているは全くの事実無根だと皆が言っているようだ。いずれにせよ、言いがかりをつけられたことは残念なことである。

周郷の天龍寺帰参問題

田向経良三位は、京都嵯峨野の天龍寺に出かけた。田向三位の子である周郷(※)を天龍寺に戻すことについて、天龍寺長老徳祥和尚が周郷を試験してみようと、とりあえず私の推薦状を求めてきたのである。徳祥和尚が光明寺長老だつた時に会つてはいるが、特に親しい知り合いというわけではない。しかし、見過ごすわけにはいかないで、推薦状を書いた次第である。田向三位は、この推薦

状にお茶十袋を添えて、和尚に渡したという。

夜になって、豊原郷秋が来た。一越調の曲を八つ演奏した。田向長資朝臣も太鼓を打って合奏した。

※「周郷」：周郷は、応永二十三年（一四一六）九月ごろ、寺内での喧嘩などを理由に、しばしば天龍寺を逃げ出して、実家の田向家に戻ってきていた（応永二十三年九月二十五日条）。

十一日、晴。田向三位が帰ってきた。長老の返事によると、周郷の天龍寺帰参は叶わなかったという。田向三位から、長老の詳しい説明を聞いた。私の想定通りだった。

椎野寺主が来たが、すぐにお帰りになった。惣徳庵主や芝殿も来た。芝殿は勾当局のところへ行つて、新内侍のことをいろいろ聞いてきたそうだ。後小松上皇様は、田向経良三位・庭田長資朝臣・世尊寺行豊朝臣の三人を特にお疑いになっておられるという。新内侍の母である勾当局が窮地に立たされることは、かれこれの事情からして、仕方のないことであろう。

伏見荘延光名の名主職

十二日、晴。正親町三条公冬大納言が言うには、延光名の名主職を正親町三条家の身分の低い侍である教基が望んでいるという。教基を呼んで確かめたところ、その通りですとの返事だった。真乗寺瀧首座が来たが、すぐに帰っていった。

十三日、朝夕、にわか雨が降った。杉殿こと庭田資子さんの二十五年忌の命日が来る十五日なので、大光明寺塔頭で小規模な仏事を執り行った。寿蔵主が事務を取り扱ってくれた。近衛局は京都にある杉殿のお墓へお参りしに行った。勝阿が酒を一献持っていた。すぐに

帰っていった。

新内侍懐妊疑惑の追及

十四日、晴。朝早く常宗から手紙で、田向経良三位と庭田重有朝臣に急いで京都へ来るようにとのことだった。私事ではありませんとも申し添えられてあった。それで二人は急いで出発し、夕方に戻ってきた。

彼らが報告することによると、昨夜、広橋兼宣が来て常宗に言うことには「昨日、室町殿が鹿苑院にいらっしゃる時、私に仰ることは『新内侍は今春の二月に伏見荘の山田に籠っている時、たびたび伏見宮家に呼ばれて寵愛されたそうじゃないか。また宮家では猿楽を鑑賞しながらの酒宴もあり、それが乱れた会にもなったとも聞き及んでおる。懐妊したのはこの二月だから、お相手は伏見宮貞成様であるのは間違いないところだろう。使者を派遣して詳しい事情を尋ねるべきだろうが、まずは内々に広橋からお尋ねしてみなさい』ということだった。

それに対して広橋は『私は伏見宮家とは疎遠でございます。常宗がいろいろと便宜をはかって宮家の取り次ぎをしているようですから、常宗に尋ねさせたらいかげんかでしょうか』と室町殿にご意見を申し上げた。そうしたら室町殿は『たしかに薬玉などを常宗が取り次いでおった。そうであれば、常宗を通して内々に尋ねさせなさい』と仰せになった』ということだった。

また室町殿は「もし伏見宮貞成殿がご存じないということであれば、宮家にお仕えしている者たちをお調べくださいと伏見宮様へお伝えしなさい」とも仰ったそうだ。このことは、後小松上皇様が室

町殿へ訴えたことによるものらしい。

以上のような広橋からの伝言を常宗が詳しく話したので、田向三位と重有朝臣の二人は、それは貞成様への全くの言いがかりだということを具体的に話したという。それに対して、「そうであれば、伏見宮様の書状をください。それを明日、室町殿にお見せします」と常宗は返事したそうだ。それで、急いで伏見に戻ってきたのです」と両人は報告した。とても驚いたし、戸惑うばかりだった。この夕方は孟蘭盆会なので、水などを廻向するはずだったが、お経を読んでいる場合ではなくなった。まずは驚くばかりである。

新内侍懐妊疑惑への申し開き

十五日、晴。朝早く常宗に書状を出した。詳しいことをかなで書いた。その内容は多岐に渡るが、要は、かの新内侍は以前も今も伏見宮家へ来たことは一度もない、この世に生を受けて以来、まったく会ったことはないのだから、かえって申し開きをするまでもない、ということだ。また伏見宮家に仕えている者たちも、この春に新内侍がお籠りしている間、彼女とまったく連絡も取っていないし、会ったこともない。これらのことを起請文(※)の形にして書きますと、皆が言っている。山田香雲庵主に尋ねたところ、「新内侍が籠っていた二十日間は、門外に彼女を出してはおりません。固く警固していたので、まったく間違いはありません」という内容の起請文を書いてくれた。これらのことについては嘘偽りが無いことを誓う起請文の形にして、詳しい内容の書面にして送った。

孟蘭盆会で蓮飯を供える

孟蘭盆会で、蓮飯をいつものようにお供えした。その後、大光明

寺へお参りし、施餓鬼会に参列した。宮家の女性たち、対御方・陽明局・今上臈・今参、それに田向三位・重有・長資ら朝臣を連れていった。まず指月庵に行き、開始時刻を待つて、大光明寺へ行った。最初に御廟の前で焼香し、お水などをお供えした。その後、山門脇の参列席に入った。惣徳庵主も一緒に参列した。すぐに施餓鬼会が始まった。長老以下三十五〜六人の僧侶が施餓鬼を行った。参列し終わってから、帰った。

※起請文(きしょうもん)：誓約の書類。その文言に嘘があったり、誓いを破ったりすると、神の罰を受けるなどと記した。

起請文で身の潔白を示す

十六日、晴。田向三位と重有朝臣は広橋や常宗のところへ出向いていった。広橋に私の書状と山田香雲庵主の起請文の写などを渡した。山田香雲庵主起請文の原本は常宗のところに提出してある。田向三位・重有・長資ら朝臣にも内々にまずは起請文を書かせた。もし私が新内侍のことを知らないということであれば、伏見宮家に仕える者どもを調べるということだったので、彼らにも起請文を書かせたのである。夕方に彼らは戻ってきた。

彼らはまず常宗のところへ行き、すぐに対面して詳しいことを話したという。常宗は、昨日書いた私の書状を広橋のところへ持っていき、詳しい説明をしたそうだ。広橋は、今日の朝のうちに、室町殿にお見せすると言っていたそうだ。

新内侍懐妊疑惑の真相

「後小松上皇様から新内侍に関する事で訴えがあったのは、この春に限ったことではないのだ。後小松上皇様は、連日、新内侍を

お呼びになって、ご寵愛なさっている。猿楽の役者である岩頭をお呼びになって、新内侍と一緒に猿楽もご覧になっているのだ。このように上皇様は新内侍をとてかわいがっておられるのだ。それなのに、こういう言いがかりが出てくるというのは、驚くべきことだ」と、常宗は声を潜めて話したという。

足利義持の対応

その後、田向三位と重有朝臣の兩人は、広橋のところへ向かった。数人が会合していたので、広橋は二人を人のいないところに連れ出して対面したという。「今朝、室町殿に伏見宮様のご書状をお見せしました。室町殿に、私のご書状をお読み申し上げ、またご自身でもお手にとってご書状をご覧になりました。ご書状のなかの、神々を呼び出してその罰を受けてもよいと誓う箇所をご覧になった折は、室町殿はご書状をわざわざ頭の上に頂いて、拜んでおられました。ご書状の内容をお信じになっている様子でした。またうわさほうそであることを詳しくご説明いたしましたので、室町殿のご不審はまず解けたようです」と広橋は語ったという。このことを内々に詳しく聞き、二人は喜んで、急ぎ伏見へ戻ってきたということだった。

北野天神の加護

すべては北野天神様のご加護により、疑いが晴れたのだ。これからもいよいよ一生懸命に北野天神を信仰しお祈りしよう。

山田香雲庵主も、庵にお帰りになった。香雲庵主は常宗のところに事情説明に行ったが、会ってはもらえなかったそうだ。常宗は広橋のところにお出かけだということで、広橋のところへ向かったが、

広橋のところでも会ってはもらえなかった（※）という。仕方なく伏見に戻ったそうだ。

※「会ってはもらえなかった」：香雲庵主の新内侍監督不行き届きを、常宗や広橋は暗に批判しているのであろう。

起請文の提出

十七日、晴。北野天満宮へ行光を代参として参詣させた。願書を奉納した。大光明寺へ祈祷するように命じた。明日から祈祷いたしますとの返事だった。蔵光庵・退蔵庵・法安寺・即成院などにも祈祷するよう命じた。夕方になって、広橋から書状が届いた。田向三位・重有朝臣・長資朝臣・山田香雲庵主に対して、牛玉宝印（※）の裏に起請文を書くようにとの室町殿の命令を伝えた書状であった。私のことについては何も書いてなかったが、室町殿のお考えを推察して、私も北野天満宮の牛玉法印の裏に起請文を書くことにした。その内容は以下のとおりである。

起請文の文面

- 一、新内侍局は、常日頃も、またその当時も、全く伏見宮家のあばら家には来たことがないこと。
- 一、新内侍局とともに、猿楽を見たり酒宴などをしたことはないこと。

一、総じて、生まれてこの方、新内侍局と手紙のやりとりをしたこともなく、ましてや会うことなどありえないこと。

これらのことについて、うそ偽りを言ったら、、、、、よつて、起請文は以上のとおりである。

田向三位・重有・長資ら朝臣・香雲庵主の起請文もこれと同じで、

若干文章を入れ替えた感じである。牛玉宝印の裏一枚に書いて、氏名と花押をそれぞれ載せることにした。ただし香雲庵主の起請文だけは田向らのものとは別紙の牛玉宝印に書いた。それぞれ回覧して名前と花押を書きつけさせた。末の世の中にありがちなことだとはいつても(※)、このような起請文をだすのは悔しいことである。誰かの言いがかりで不名誉なうわさを立てられたことを、我が国の神や仏はきつと憐れんでくれることだろう。いよいよ一生懸命祈禱するように、皆に命じたところである。

勾当局は称光天皇から指弾されて、内裏女房としての生活が絶たれようとしている。しかし、上皇様や室町殿が救いの手を差し伸べてくださっているのです、かろうじてそれにおすがりするばかりだろうだ。

椎野寺主が来て、この事件に驚いていた。

※牛玉宝印(ごおうほういん)：寺社から出される、牛玉法印の文字や宝珠などが記された護符。その裏面は起請文を記す用紙とされた。
 ※「末の世の中にありがちなことだとはいつても」：原文では「末代といえども質に背かず」とある。

御香宮に裸足でお百度参り

十八日、晴。朝早く御香宮にお参りした。今日から三日間連続でお参りする。そして般若心経を自分一人で千巻読み、裸足でお百度参りをするに決めた。こうして三日間、誠心誠意お祈りをしよう。田向三位・重有・長資ら朝臣も同参する。法安寺住職が酒樽を一つ持って来た。また物徳庵主も来た。客人が重なったので、酒宴となった。

さて最近、称光天皇陛下の体調が少々悪いので、今日から朝廷でご祈禱を行うそうだ。導師は妙法院宮堯仁法親王だという。

今出川南向三回忌

十九日、晴。朝早く法華経提婆品一卷を書き写し、錢三貫文を加えて、お布施として今出川家へ送った。明日は、今出川左大臣の母である故南向殿の三回忌だ。南向殿は私の養母なので、気持ちばかりのものを送ったのである。今出川左大臣から、誠にありがたいですとの返事があった。今出川家では、通常の法要に加え、施餓鬼も行ったそうだ。

聞くところによると、山科教興中納言が亡くなったそうだ。何日間も病にふせていたらしい。このような病状を考慮して、この前、彼を中納言に昇進させたということだ。

伏見荘の地侍たちに千度参りをさせる

さて伏見荘の地侍たちに御香宮に千度参り、山田宮と権現にも同じく千度参りの祈禱をするように命じた。私も昨日のように御香宮にお百度参りをした。芳徳庵主が来て、新内侍懐妊の嫌疑を受けた一件に驚いていた。田向三位が常宗に書状を送って尋ねたところ、この一件に関する室町殿のご不審は晴れたそうだ。何も問題はないという。よかった、よかった。

二十日、晴。御香宮の神前で、大般若経を略読させた。私も参詣し、三日間のお百度参りも無事終わった。神様もきつと私の願いを受け止めてくれたことであろう。

田向経良ら石清水八幡宮に参詣する

田向三位・重有・長資ら朝臣と寿蔵主は、石清水八幡宮へ参詣し

に行つた。新内侍懐妊嫌疑の一件を収めるための祈願である。

二十二日、晴。田向三位が広橋と常宗のところへ出かけた。川魚や酒樽を両方へ持つていかせた。夕方に帰つてきた。田向はとても酔つていた。

足利義持の対応

広橋が言ったことを田向が話してくれた。広橋が室町殿へ起請文をお見せしたら、「恐れ多いことだ」と仰つて、室町殿ご自身でご覧になるうとはしなかつた。それで広橋に読んで聞かせなさいと仰つたので、すぐにお読みした。伏見宮家にお仕える者たちをも調査するところまで読んだところ（※）、「むりやり、このよくなことまでさせるほど伏見宮家を追い込むとは、恐れ多いことだ」と室町殿は仰つたという。

「このことを上皇様へお知らせしなさい、しっかりと厳しく申し入れるのだぞ」とお命じになった。それで広橋はすぐに上皇御所へ行き、この旨をお伝えしたところ、上皇様はあれこれと言ひ逃ればかりで、はつきりとしたお返事がない。それで、仕方なくそのまま退出した。そして室町殿の御所へ戻つて、上皇御所でのありさまを報告したところ、室町殿は「やはり思った通りだ」とのご返事だった。「この上はもう、この件について何もすることはない」と仰つた。まずは問題が解決したといえましょう。おめでとうございますと広橋は申したという。

まずは一安心で、とても喜ばしい。上皇様のことだから、この次、また何かと要求してくることは想定内である。しかし、この先どうなるかについては樂觀できない。広橋は、室町殿の御所内の大勢が

集まっている広間で、新内侍と上皇様の顛末を皆で雑談して談笑したという。

その後、田向三位は常宗のところへ行き、引き出物のお酒を進めた。常宗はかしこまつて、その引き出物を受け取つたという。

猿楽役者岩頭の証言

さて室町殿は猿楽の役者である岩頭を御所に呼んで、猿楽の演技場所について聞いたのだそうだ。岩頭は、「伏見宮様にお目にかつたことは全くありませんし、猿楽をご覧に入れたこともございません」と答えたという。これでまた、さらに室町殿のご不審は晴れたようだ。室町殿のお考えとして、今回の件は全くのいいがかりだとお思ひになつたことであろう。

藤原能子勾当局の進退

新内侍の母である勾当局の進退について、「今後は召し使わないので、部屋を明け渡しなさい」と、称光天皇陛下や後小松上皇様からご命令があつたという。しかし室町殿は、この天皇陛下や上皇様のご命令を、頑固としてお認めにはならなかつた。勾当局は、故入道北山殿（足利義満）以来、長年お勤めしてきているので、今回の処置はひどすぎると仰つたそうだ。勾当局自身に対して、滅多なことでは部屋を出てはいけなないと、室町殿から内々の仰せがあつたそうだ。

※「すぐにお読みした。伏見宮家にお仕える者たちをも調査するところ」というところまで読んだところ」：原文では「すなわち読み申す。祇候の輩に仰せらるるところ」とある。文章が簡略すぎており、記述が抜けているものと思われる。

二十三日、晴。夕方に大雨が降った。大光明寺に三日間、大般若経を略読するように依頼した。退蔵庵でも五日間、大般若経を略読すると庵主が言ってきた。退蔵庵主と会って、疑いが晴れて喜んでいることを話し、仏のご加護を祈祷してもらったことを感謝した。蔵光庵主にも同様に謝意を伝えたいので、今後も精一杯祈祷するように依頼した。ことが無事に済んだのは祈祷による仏のご加護のおかげである。ありがたいことだ。

北野天満宮への代参

二十五日、雨が降った。朝早く、御香宮・山田宮・権現の三社に参詣した。また北野天満宮へ七日間、代理として参詣することを西大路隆富に命じた。西大路家の身分の低い侍に参詣させるとのことだった。そうしたら、いささかめでたい兆しがあったと西大路から報告があった。伏見宮家が無実であることを天神様をご覧になっていて、私たちの祈祷を受け入れてくれたのであろう。頼もしい限りである。

毎月恒例の連歌会、田向三位が今月の当番幹事として、いつものように準備をしてくれた。参加者は椎野寺主や田向三位以下いつもの面々である。夕方までに百韻を詠み終った。

二十六日、雨が降った。椎野寺主が寺に帰った。さてこの二十八日に室町殿の養子になっていた一条経嗣関白の子息が青蓮院で出家するそうさ。そして鎌倉の大御堂に移るらしい。世尊寺行豊朝臣がこの出家の儀式の所役をするように命じられたそうさ。出家の儀式は着座の次第からすべて厳粛に執り行われたという。

後小松上皇の八朔返礼

二十八日、晴。冷泉正永が来た。後小松上皇様から昨年の八朔のお返

しが下された。冷泉永基が上皇御所の取り次ぎ役だったので、その品を正永が持ってきてくれたのである。堆朱(ついしゅ)の香箱(※)が金欄の袋に入っていた。それに堆朱のお盆や引合紙二十帖も下さった。思いがけないことで、とても喜ばしい。近日、上皇様のお気持ちにすぐわなないことがあったばかりなのに、このようにお返しを下さったということは、伏見宮家が無実であったことを上皇様もお認めくださったということであろうか。このことを思うと、喜びやめでたさも相半ばといった心持ちになるものだ。

※「香箱」：香箱には「張成造」という割注があるが、未詳。

二十九日、雨が降った。夜になって、車軸のような大雨となった。深夜から翌日の明け方にかけて、雷が落ちて大地が揺れた。雷の光で、まるで昼のような明るさだった。

三十日、晴。冷泉正永が帰っていった。八朔の進物の準備で、ただただ忙しかった。

八朔の贈答品

八月一日、晴。「八朔のめでたい習わしで、秋のめでたい兆しがあって、とても幸せだ」と予祝した。後小松上皇様への八朔の贈答品は、「立石」という銘のある大鉢一つ、飛んでいる小鳥を打ち付けて地紋に鳥籠をあしらった銚子提、それに引合紙三十帖である。冷泉永基を通してそれらを進上した。

室町殿への八朔の贈答品は、酒海という酒の大甕、銚子提、それに引合紙五十帖である。室町殿の若君への贈答品は、銅に鍍金した盃と折敷、橘の造花を打ち付けて三種類の肴を入れた銚子提、それに引合紙三十帖である。若君には、内々に御所女房を通して、献上

した。今年、私が宮家の当主として初めて若君に対してお贈りしたところである。

伏見宮家では宮家の男女がいつものように種々の贈答品をくれた。田向三位がいつものように一献の酒宴を準備してくれた。今出川家・正親町三条家・勤修寺家などからも例年のように、八朔の進物が贈られてきた。進物の詳細は別紙に記録した。

琵琶法師の了珍座頭

二日、晴。朝早く室町殿と若君から八朔のお返しが届いた。昨日夕方時分に京都から送り出したのだが、使者が途中で日が明けるのを待っていたので、届くのが今日になってしまったそうだ。室町殿からは絹織物の練貫三重と縁を金めつきで飾った太刀一振、若君からは銀の水瓶、紫檀の机、銚子提、それに引合紙十帖であった。初めてのお返しなので、特にうれしかった。琵琶法師の了珍座頭が来て、平家物語を四〇五句語った。ご褒美に扇と檀紙などを与えた。

三日、雨が降った。今出川家から三日憑みの酒一献などが送られてきた。寿蔵主も御憑みの酒一献をいつものように持ってきた。芝殿や惣徳庵主も来た。一献が重なって、何献もの酒宴になった。

四日、晴。綾小路信俊前参議が来た。御憑みの太刀一振を持ってきた。ちよつとした酒宴などを用意してくれた。

五日、晴。音楽会で、平調の曲七つと朗詠をした。綾小路前参議や長資朝臣らが参加した。長橋局藤原能子殿から御憑みの贈答品が送られてきた。すぐにお返し品の品を送った。

牛飼童の孫石丸・孫高丸

六日、晴。御憑みのお返しを、宮家の男女に与えた。勝阿が、今日、

御憑みの品を持ってきた。これほど遅れるとは、けしからんことだ。牛飼童の孫石丸とその子である孫高丸が来た。御前に呼んで対面した。綾小路前参議が取り次ぎ役をした。二人に扇を与えた。風呂に入った。夜に音楽会で、盤渉調の曲八つと朗詠二首をした。綾小路前参議や長資朝臣らが参加した。

七日、晴。朝早く音楽会をした。高麗曲七つと朗詠三〇四首を行った。音楽会が終わって、綾小路前参議は帰っていった。

九日、水無瀬具隆三位に頼まれていた源氏物語二帖を書写し終わり、送った。この件は惣徳庵主が取り次いでいたので、源氏物語は惣徳庵へ送った。

栄仁親王の護り太刀

さて大通院の御太刀は、事情があつて、他所へお預けになっていた。お預けになって何年にもなるので、今日、取り戻した。この太刀は、故五辻朝仲宮内卿入道真覚の仲介で、錢二十貫文で購入したという重宝である。御護りの太刀なので、取り戻した。久しぶりにこの太刀を目にすることができて、うれしい。永福門女院の御念珠もやはり他所へ預けてあったので、同じく取り戻した。これは、先祖代々大事にしてきた宝物である。

陸奥大名南部守行の上洛

十日、晴。聞くところによると、関東の大名である南部守行が上洛して、室町殿に馬百頭と砂金千両を献上したそうだ。また斯波義教勲解由小路右兵衛督が病気で、危篤だそうだ。

十二日、晴。水無瀬から「源氏物語書写に関して、いろいろとありがとうございました」と礼状が届いた。懇切な手紙で、ほめそやした

言葉など、かえって慇懃無礼に感じた。斯波義教右兵衛督の病状は持ち直したらしい。

十三日、晴。御香宮に参詣した。今日から、毎月お参りするように決めた。まずはこの先三年間、毎月参詣できるように願いを立てた。

十四日、晴。石清水八幡宮放生会に、田向長資朝臣は警護役として出仕するそうだ。それで今日の夕方から八幡宮に向かった。世尊寺行豊朝臣も一緒だという。聞くところによると、先日焼失した相国寺法界門は先月に立柱し、ついこの前、竣工したそうだ。

石清水八幡宮放生会神幸の延期

十五日、晴。石清水八幡宮放生会で神人たちが訴訟をしたので、お神輿の巡行は取りやめとなった。三十余りの条項に渉る訴訟で、そのほとんどに判決はでている。しかし今なお大きな訴訟項目が残っているのです、お神輿を神人たちが引き留めた。そのため、仕方なく巡行は中止となった。お神輿巡行は来月になる模様だという。

一昨年も、同じような事情で神輿巡行が延期となり、今年もまた同様の状態である。神様の思召しはいかがであらうか。すべては石清水八幡宮長官である社務の不手際によるものだそうだ。放生会執行責任者の公卿は久我清通中納言、随行する参議役は西園寺実光京極参議兼中将、同じく随行の事務担当役は勸修寺経興、警護役は田向長資朝臣である。これらの人々は、出仕しながらも、不必要な事柄に煩わされているのであらう。

今夜は名月で、ことさらに月が美しい。ただ宮家に人がいないので、連歌会で月を詠むことができない。しかたないので私一人で月を詠った。特に月を愛でた。

十六日、晴。お彼岸の初日である。田向三位・重有・長資ら朝臣が石清水八幡宮から戻ってきた。神輿巡行延期など煩わしいことがあって大変でしたと言っていた。午前九時に小さな地震があった。火の神が動いたのであらう。今日の明け方も地鳴りがしたそうだが、私には聞こえなかった。不思議である。

十七日、雨が降った。室町殿は今日から五壇法をお始めになるそうだ。導師は聖護院道意だそうだ。いくつかの神社で不思議なことが相次いで起こった。特に石清水八幡宮・日吉大社・北野天満宮などで不思議なことがあったそうだ。そのご祈祷のための五壇法だという。

盲目の女芸人愛寿・菊寿

夜に盲目の女芸人である愛寿と菊寿が来た。愛寿は、これまでも伏見に来たことがある。菊寿は初めてだ。この菊寿は、愛寿のお弟子さんだそうだ。御前に呼んで、芸能をさせた。今様を五く六句歌った(※)。芝殿以下、大勢の聴衆が集まった。今様を詠い終わってから、褒美を与えた。褒美の品は、練香、髪結び紐や檀紙十帖である。その後、台所でまた一く二句歌った。

※「今様を五く六句歌った」：原文では「五六句申」とだけ書かれているが、後文に「歌了わりて」とあるので、今様と解した。

斯波義教の死

十八日、晴。斯波義教勸解由小路右兵衛督が今日の午後三時に亡くなったそうだ。世のため、人のためにも、穏やかな人柄だった。もつとも惜しい人を亡くしたものだ。昨日、室町殿が斯波家の屋敷にお入りになった。斯波義教が跡継ぎのことなどを遺言したので、その場ですぐに室町殿は所領継承の承認書に花押をお書きになったそう

だ。

周乾首座がいらっしゃった。明日、奈良へ行き、西大寺で光明真言の法会に参列なさるといふ。父・大通院三回忌の法事のために、今日から法華経を自筆で書写し始めた。

十九日、小雨が時々降った。聞くところによると、斯波義教右兵衛督の臨終の際、死に際に悟り正座し合掌しながら往生したそうだ。大勢の人々が群れ集まって、その様子を拝んだという。室町殿も斯波家の屋敷において間近でご覧になったという。斯波義教の遺体は、嵯峨野の法音院に土葬した。遺言により、そのように葬ったのだそ
うだ。

二十二日、晴。お彼岸の最終日である。身を浄めた。周乾首座がい
らっしゃった。昨日、奈良からお戻りになったそうだ。光明上皇の
子息である法華寺長老とお会いして、いろいろなこととお話した
と仰った。

栄仁親王の仏舍利

さて、父・大通院が持ち伝えていた仏舍利を拝見したいと周乾首
座が以前から何度も仰っていたので、今回、取り出してお見せした。
ご希望であろうと思ひ、そのうち三粒をさしあげた。お彼岸の最終
日であったので、他の者たちにも仏舍利を見せた。仏舍利に対して、
焼香した。また庭田重有朝臣が持っている仏舍利も周乾首座にさし
あげた。

二十三日、晴。指月庵にお参りした。指月庵主に言っておくことがあつ
た。鄂隠和尚が隠居したあと、いまだ音信不通である。隠居してい
る土佐国吸江庵は連絡に不便な場所なので、便利な大幢院に移った

らしいのにと指月庵主の廓首座が言っていた。そのことを私から提
案すべく、書状を書いた。その書状を指月庵主に託して、大幢院に
渡してもらうことにしたのである。

二十四日、曇。珠侍者が来た。障子に飾る色紙や漢詩について相談す
るために、呼んだのである。

二十五日、晴。毎月恒例の連歌会を重有朝臣が当番の幹事として、い
つものように準備した。参加者は、田向三位・重有・長資ら朝臣・
行豊朝臣（行豊は五十韻終わったところから参加した）・正永・善基・
明盛・行光らである。夜になってから百韻が終わった。周乾首座が
いらっしゃった。

二十七日、晴。いつものように風呂に入った。正永が帰っていった。

田向長資の女兒、魚味の祝い

二十八日、晴。西大路隆富が酒一献を持ってきた。酒を飲んだ後、帰つ
ていった。田向長資朝臣の娘に御膳をだして、魚味のお祝いをした
そうだ。

野遊びの栗拾い

晦日（二十九日）、晴。野遊びに出かけた。田向三位・重有朝臣・長
資朝臣・寿蔵主らをお供に連れて、蒼玉庵に行った。庵主は留守の
ようだった。しかし、庵の栗林に入って栗を拾った。庵主が留守な
のに、分別もなく、調子に乗りすぎてしまった。

その後、楊柳寺に行った。このお寺はまだ見たことがなかったの
で、本尊の観音像を拝見した。住職がお酒を振る舞ってくれた。思
いがけなく、二〜三献の酒を飲んで帰ってきた。

その後、蒼玉庵主がお酒を少し持参して宮家に来た。「留守の間

にいらっしやったそうで、何のおもてなしもできぬ不行き届き、誠に申し訳ございません」と申した。面会して、「こちらこそ、お留守の間、勝手に粟拾いをして申し訳ない」と謝っておいた。酒を出してから、庵主はすぐに帰っていった。(続)